

しんぱん
しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいにしょう
じっせん
第二章 実践

しよてん
かご
諸天の加護

ぎようじや かなら ふじつ

ちえ 愚

み

行者は必ず不実なりとも、智慧はおろかなりとも、身は

ふじよう

かいとく そな

なんみようほうれんげきよう

もう

不浄なりとも、戒徳は備えずとも、南無妙法蓮華經と申さ

かなら しゆご たも

ば必ず守護し給うべし。

ふくろ

汚

こがね す

いらん

憎

袋きたなしとて金を捨つることなかれ。伊蘭をにくま

せんだん

たに

いけ

ふじよう

きら

はちす

と

ば梅檀あるべからず。谷の池を不浄なりと嫌わば蓮を取

らざるべし。

(035 祈禱抄

きとうしよう

しよてん

かご

諸天の加護 593 ページ 1 行)

にちれん まなこ 恐

日蓮が眼おそろしくば、いそぎいそぎ仏前の誓いはた

たま

し給え。

急

ぶつぜん

ちか

果

(047 神国王御書

しんこくおうごしよ

しよてん

かご

諸天の加護

685

ページー3行)

いま にほんこく あん

よはじ

ひさ

な

今、日本国を案ずるに、代始まつてすでに久しく成りぬ。

ふる しゅご ぜんじん

さだ

ふく

つ

じゅ

げん

いこう

旧き守護の善神は、定めて福も尽き、寿も減じ、威光

せいりよく おとろ

ぶつぼう

あじ

嘗

いこうせいりよく

勢力も衰えぬらん。仏法の味をなめてこそ威光勢力も

ぞうちよう

ぶつぼう

あじ

みな 違

よわい

長

増長すべきに、仏法の味は皆たがいぬ。齢はたけぬ。い

くに

わざわ

はら

うじこ

しゅご

かでか、国の災いを払い、氏子をも守護すべき。

かんぎようはちまんしよう

(050 諫曉八幡抄

しよてん

かご

諸天の加護 733 ページ 4 行)

ほとけ せかい たほう せかい ぼんしやく にちがつ してん りゆうじん
仏この世界と他方の世界との梵釈・日月・四天・竜神
とう あつ わ しょうぞうまつ じかい はい むかいとう でしとう
等を集めて、我が正像末の持戒・破戒・無戒等の弟子等
だいろくてん まおう あつきじんとう にんのう じんみんとう み い のう
を第六天の魔王・悪鬼神等が人王・人民等の身に入つて悩
らん み き じばつ しゆゆ 過
乱せんを、見ながら聞きながら治罰せずして須臾もすごす
かなら ぼんしやくとう つか してんのう おお
ならば、必ず梵釈等の使いをして四天王に仰せつけて
じばつ くわ
治罰を加うべし。

050 諫曉八幡抄

かんぎようはちまんしょう

しよてん かご
諸天の加護
733 ページ 11 行

きようもん

なんみようほうれんげきよう

もう

ひと

経文のごとくば、南無妙法蓮華経と申す人をば、

だいぼんてん

たいしやく

にちがつ

してんとう

ちゅうや

しゅご

み

大梵天・帝釈・日月・四天等、昼夜に守護すべしと見え

たり。

(050 諫曉八幡抄

かんぎようはちまんしよう

しよてん

かご

諸天の加護747ページー5行)

きようもん

なんみようほうれんげきよう

とな

ひと

だいぼんてん

経文のとおりならば、南無妙法蓮華経と唱える人を大梵天

のう

たいしやくてん

につてん

がつてん

してんのう

しよてんぜんじん

ちゅうや

まも

王、帝釈天、日天、月天、四天王などの諸天善神が昼夜に守る

であらうとあります。

こんこうみようきよう

い

ひ

てんし

がってん

きょうてん

金光明経に云わく「日の天子および月天、この經典を

き

しょうけじゅうじつ

聞き、精気充実す」

さいしやうおうきよう

い

ひい

せんこう

はな

むくえん

最勝王経に云わく「日出でて千光を放ち、無垢焰

しょうじよう

きやうおう

ちから

よ

るき

してん

めぐ

清浄なり。この経王の力に由つて、流暉、四天を遶

る」

092

日月の事

にちがつ

こと

しよてん

かご

諸天の加護
978ページー13行

まっぼう

ほっけ

ぎよう

もの

しよてん

しゅご

あ

末法において法華を行ずる者をば、諸天の守護これ有る

じよういほうこ

つね ほう

ゆえ

ほう

べし。「常為法故（常に法のための故に）」の「法」と

なんみようほうれんげきよう

は、南無妙法蓮華經これなり。

おんぎくでん

（095 御義口伝

しよてん

かご

諸天の加護

1046

ページー2行

ほうとうほん

ぶつちよく

たま

ぞくるいほん

ほとけ

いただき

宝塔品にして仏勅をうけ給い、嘱累品にして仏に頂を

摩

せそん

みことのり

まさ

なでられまいらせ、『世尊の勅のごとく、当につぶさに

ぶぎよう

せいじよう

立

てん

ぶつぜん

ちか

奉行すべし』と誓状をたてし天ぞかし。仏前の誓いは

にちれん

むな

日蓮なくば虚しくてこそおわすべけれ。

しゅじゅおんふるまいごしよ

（107種々御振舞御書

しよてん

かご

諸天の加護

1233

ページー10行

きようもん かんが み にちれん ほけきよう ぎようじゃ
ほぼ經文を勘え見るに、日蓮、法華經の行者たること

うたが いま てん かご こうむ いち

疑いなきか。ただし、今に天の加護を蒙らざるは、一に

しよてんぜんじん あつこく さ ゆえ に ぜんじん ほうみ

は、諸天善神この悪国を去る故か。二には、善神、法味を

あじ ゆえ いこうせいりよくな さん だいあつき

味わわざるが故に威光勢力無きか。三には、大悪鬼、

さんるい しんちゆう い ぼんてん たいしやく ちからおよ とう

三類の心中に入り、梵天・帝釈も力及ばざるか等

ときどのごへんじ しよてんかご ゆえん こと

(123 富木殿御返事 (諸天加護なき所以の事)

しよてん かご

諸天の加護 1292 ページ 9 行)

きようもん よ しさく にちれん ほけきよう ぎようじゃ

だいたい經文を読み思索してみると、日蓮が法華經の行者であ

なん

ることは疑いないところです。ただしいま (難にあつていても)、

しよてんぜんじん しゅご

りゆう

だいいち

しよてんぜんじん

あつこく

諸天善神の守護をうけない理由は、第一に諸天善神がこの悪国で

にほん さ

だいに

ほけきようひぼう

もの

おお

しよてん

ある日本を去ったためであり、第二には法華経誹謗の者が多く諸天

ぜんじん

ほけきよう

ほうみ

あじ

いきお

ちから

善神が法華経の法味を味わえないため勢いも力もなくなつたため

だいさん

あつきじん

さんるい

ごうてき

こころ

なか

はい

であり、第三には悪鬼神が三類の強敵の心の中に入ってしまったて

だいぼんてんのう

たいしやくてんのう

ちから

およ

いて大梵天王や帝釈天王も力が及ばないためでありましょう。

つね ひと まも
「常に人を護るといえども、必ず心の固きに仮つて、神
まも すなわ つよ
の守り則ち強し」。

136 道場神守護事

どうじょうしんしゅごじ

しよてん かご
諸天の加護
1321 ページ 1 行

ほけきよう ぎよう

もの

しよてんぜんじんとう

男

法華經を行ぜん者をば、諸天善神等、あるいはおとこと

おんな

かたち 変

くよう

なり、あるいは女となり、形をかえ、さまざまに供養し

助

きようもん

やさぶろうどのふうふ

しによ

てたすくべしという経文なり。弥三郎殿夫婦の「士女」

う

にちれんほつし

くよう

うたが

と生まれて、日蓮法師を供養すること疑いなし。

ふなもりやさぶろうもとごしよ

259 船守弥三郎許御書

しよてん かご

諸天の加護 1722 ページ 17 行

家　　うち

患

そうろう

きじん

所為

いへの内にわずらいの候なるは。よも鬼神のそいには

そうら

じゆう　羅

刹　によ

しんじん

分　　際

おんこころ

候わじ。十らせち女の、信心のぶんざいを御心みぞ

そうろう

きじん

ほけきよう

ぎようじや

悩

候らん。まことの鬼神ならば、法華經の行者をなやま

頭

破

思

きじん

そうろう

してこうべわれんとおもう鬼神の候べきか。

うえのどのごへんじ

すいかにしんしょう

314 上野殿御返事（水火二信抄）

しよてん　かご

諸天の加護 1872 ページ 3 行

こころ

顕

色

たとい心ざしありともあらわしがたきに、いまいろをあ

たも

知

定

らわさせ給うにしりぬ、おぼろけならぬことなり。さだめ

ほけきよう

じゅうらせつ

守

たま

頼

て法華經の十羅刹まぼらせ給いぬらんと、たのもしくこそ

そちら

こと尽

候え。事つくしがたし。

くろうたろうどのごへんじ

だいもくぶつしゆ

こと

(322 九郎太郎殿御返事 (題目仏種の事))

しよてん

かご

諸天の加護
ページー8行

1885

にちがつ ぶつぽう 嘗 いこうせいりよく ま たも み そうろう
日月は仏法をなめて威光勢力を増し給うと見えて候。

411 妙一女御返事 (即身成仏法門)
みょういちによごへんじ そくしんじようぶつほうもん

しよてん かご
諸天の加護 2130 ページ 11 行